市民プレス

平成29年
(2017年)
10月5日
第78号

発行人 「市民フォーラム」
編集人 原 昭二
制 作 デジタル工房
TEL 090(3048)5502
〒353-0004
埼玉県志木市本町 2-4-43

E-mail
hara@camelianet.com

SHIMIN PRESS

市民の目線で市民が発信する地域情報紙
WEB SHIMIN
http://shimin.camelianet.com
「市民プレス」電子版（無料）を公開しました
http://pr-shimin.camelianet.com
電子書籍専用のアプリケーション等でお読み下さい。

CONTENTS

-PAGE 1
武蔵野台地の小さな街の記憶　その六
市制が施行され、昭和から平成の時代へ！
宗岡尋常小学校の改築、秋が瀬飛行場
志木町立商業学校の設立から廃校まで・・・
-PAGE 2
松永安左エ門と東邦産業研究所 、その研究項目は・・・ 一町三村が合併して志紀町に
終戦を迎える　慶応義塾の校地となる
-PAGE 3
『埼玉タイムス』の発刊　志紀町が解体される
志木町と宗岡村が合併、足立町に　伊豆殿が消失
志木市の誕生　ニュータンの開発へ
-PAGE 4
志木市本町五丁目の展開・・・　平成時代の志木市
「ダイエー志木店」が閉店する・・・・・・・

武蔵野台地の小さな街の記憶　その六

市制が施行され、昭和から平成の時代へ！

＝年表は語る＝
時代を反映して苦難の道を歩む
戦後の志木と宗岡・・・

鉄道の開通によって、新河岸川の「舟運」に終止符が打たれる。

昭和六年（1931）、満州事変で始まった日中戦争は、やがて太平洋戦争へ、そして昭和二十年（1945）八月十五日、日本の全面的な降伏！

終戦後には、食べ物にも窮したが、這い上がって、国際的な経済活動に励み、世界の平和を目指す。

六・一　荒川、新河岸川の改修

江戸時代には、荒川を「外川」と、新河岸川を「内川」と呼んでいた。内川には「九十九曲り」と云われた多数の屈曲があり、これが、流量を保つことに役立ち、江戸への舟運が成立していた（斉藤貞夫：『川越舟運＝江戸と小江戸を結んで三百年』、さきたま出版会刊）。しかし、鉄道の建設によって舟運は衰退した。一方、洪水の被害を防止するため、流路を直線化する河川改修が計画された。

端緒となったのは、明治四十三年（1910）の関東大水害である。荒川から逆流した新河岸川の水が上流から流れ込む濁流と併せて溢れ、沿岸に甚大な被害をもたらした。そこで、荒川改修が計画されたが、内川では、洪水防御の他に江戸時代から続く舟運等の船舶航行も必要とされた。

「志木の水門」（宗岡閘門と洗堰）

昭和三年（1928）、閘門（水位の異なる水路で、船舶を上下させる装置）と洗堰（川を塞き止める堤）の新設が決まって着工、昭和四年（1929）に竣工した。

閘門には、基礎杭として長さ18尺（5.5m）～35尺（10.6m）の松丸太が使用された。主体は全て鉄筋コンクリート造りで、通船幅19尺8寸（6.0m）、閘室（船が上下する部分）有効長85尺（25.8m）。扉は前後各二枚の鋼鉄製観音開き型、扉一枚の重量は約1,200貫（4.5t）、開閉は人力により、一回の通船操作時間は約20分だった。

昭和五年(1930)には、「いろは橋」が架橋される。また、「いろは樋」の木管は、明治三十一年の工事で鉄管に変えられたが、老朽化したため、このとき架け替えられた。

同年十一月、「新河岸川改修工事」が終了して、竣工式が挙行された。だが、翌、昭和六年の十一月には、県の通船停止令によって、新河岸川の舟運は終了する。

改修工事は、歴史的な「舟運」の廃止に止めを刺す結果を担ったことになる。

時代は下って、戦後の復興がたけなわになると、河川に流れ込む下水に含まれる洗剤等によって、水門の近辺に、大量の水泡が現われる。昭和五十五年（1980）一月、「水門」は遂に撤去される。

六・二　宗岡尋常小学校が改築されて落成する

昭和四年十二月、県下に誇るモダンな校舎だった。校庭には、明治時代の終りに、大正天皇の御成婚を祝して数十本の楠（くすのき）が植えられていた。

昭和28年ころの「閘門」風景

大木新司「志木の水門」

「閘門」の人力捲揚げ装置（郷土資料館蔵）

原貝次郎「宗岡小学校」

六・三　「秋ヶ瀬飛行場」の開設

昭和六年に始まった「中華民国」との日中戦争（「支那事変」と呼ばれたが、「支那」は中国の通史的な呼び方）は、拡大の一途を辿る。その一つ、埼玉第一飛行場が設置された。

昭和十一年（1936）、現・志木市側の荒川に沿った広い敷地に「秋ヶ瀬飛行場」がオープンする。「浦和飛行場」とも呼ばれた。設置者は埼玉義勇飛行会で、滑走路がつくられ、グライダーの訓練が行われた。当時の若きエリートが目指した「少年航空兵」の予備校ともいえる機能をもっていた。

編集人は、当時の浦和中学（のちに県立浦和高校）の生徒として、グライダーの訓練を受けた経験をもつ。二本に分かれたゴム索（ゴムバンドの束）を十数人で引張り、後部の尾翼の傍のフックをもつ手が離されると発進する仕掛けだった。

当時、若き飛行士の訓練を一手に引き受けていたのは、地元出身のパイロット、高橋金三郎氏で、空を駆け巡る姿は、若者の憧れの的だった（『市民プレス』19号参照）。

宗岡小学校（右の写真）
初代、麦藁屋根の旧校舎が改築され、新しい風景が生まれる

六・四　昭和十三年、「秋ヶ瀬橋」（トラス構造をもつ）が竣工する。

秋ヶ瀬橋の古材を再利用して、「羽根倉橋」（仮橋）が仮設される。

トラス橋は、部材を三角形に繋ぎ、これを繰り返して橋脚上の桁（けた）（水平部材）にするもの。

左の写真は『記憶の中の風景 -写された20世紀の浦和-』さいたま市立浦和博物館蔵

羽根倉橋を渡る路線バス

右岸上流より望む。撮影年代は昭和三十年代か？

立に発展した。高校への昇格を図るべきとする議員と、廃校止む無しとする議員に二分されたため、評決で決着が図られた結果、廃校の道を辿ることになる。若者の大きな希望は無惨にも断ち切られ、大きなこころの傷を負った。昭和二十三年二月、紛争は実に十三ヶ月に及んだが、ここに悲しい終止符は打たれたのである。

町立商業学校の開校のころ・・・

一期生だった石山利和（のちに和光市神社宮司）は語っている（『市民プレス』42号）。

入学したのは五十人で、志木町十人、朝霞町六人、大和田町（現・新座市の一部）五人、鶴瀬村（現・富士見市の一部）宗岡村三人、内間木村（現・朝霞市の一部）三人、新倉村・白子村（現・和光市の一部）それぞれ二人、川越市三人ほかだった。

開校した当初の教室として、中庭を隔てて小学校裏手に残されていた旧校舎だった。古色蒼然たる佇まいの教室で、校長、教員は、小学校兼任の方が多く、新設という新鮮さは皆無だった。しかし、希望に満ちて入学した生徒は、やがて新築される予定の新校舎の完成を待ちわびた。

教員は、国学院大学卒の新鋭、支那語（現・中国語）の先生以外は志木小学校の兼任で、校長もしかり、威厳に満ちた堂々たる宮原吉之助先生が兼任した。

石山さんは語る。現・和光市（当時の「新倉村」）から砂利道の野火止を通り、朝霞の下の原から境久保を経て志木の踏切りを渡ると、「東邦産業研究所」のモダンな三角屋根の玄関の前に出る。駅前の桜並木の新道を通って畑の続く道をゆくと、左が志木小学校、右は志木町役場だった。

昭和十八年に新校舎の工事が始まると、生徒たちは喜び勇んで屋

六・五　志木町立商業学校設立から廃校まで・・・

昭和十四年四月のことになる。この地域で唯一となる実業学校として、「志木商業学校」が設立され、志木小学校の校舎に隣接するかたちで開校した。志木町のほか、近隣の町村から期待に溢れた若者たちが入学した。その後生徒数も増加したので，新しい校地を求め、中野地区に校舎を新築した。

しかし、文部省が新学制度を決めたため、企画に合った設備が要求され、その予算をもたなかったための遅れは、町政上の激しい対

根瓦を両手に抱え、志木駅から柏町の工事現場まで歩いて運んだが、完成しないうちに十二月には繰り上げ卒業となる。

左の写真は、新設された「志木商業」の一年生が学んだ教室

昭和九年ころ建築された二階建て校舎の裏手にある古色蒼然たる旧校舎で、高等科（二年制）が使っていた。

明治三十六年、「志木小学校」の校舎として建てられた時代には、モダンな建築として話題となり、開校祝賀式は絵葉書になった。

下の写真は、町立志木商業学校の新校舎

昭和二十四年（1949）廃校されて、その跡地に「志木中学校」が移設される。

再び建替えられて、昭和五十年（1975）、「志木第三小学校」が開校された。

六・六　松永安左エ門と東邦産業研究所

志木駅前の土地、五万坪が、電力会社によって取得される（昭和十一年か?）。主謀者は、各地の電力会社と結び、電力王の名をほしいままにしていた松永安左エ門である。志木市の東側に沿った広大な土地の買収について、地権者は、西川家（西武）で、買収には、井下田家が関与していたのでは、と推定されている。

神山健吉は、広大な武蔵野の一角で繰り広げられた物語りを詳細に調査し、『志木市郷土史』22号(1993)に寄稿されている。以下は、同氏の私見を加えて、ストーリーを辿ることにしたい。

松永は、東邦電力の創立五十周年記念事業として、財団法人「東邦産業研究所」を設立し、この地に東京試験所の建設を開始した。

・・・

(「有隣寮」、「高翔寮」と命名)。定員は二百五十人、八クラスの体制となる。

六・九　『埼玉タイムス』が発刊されたのは・・・

昭和二十二年(1947)三月のことである。その頃の世相を振り返ってみよう。終戦直前まで軍国主義一色、人々は物資欠乏の生活に耐えていた。徴兵制度で出征し、中国、南方の戦線などで戦死、または負傷した人々の数は日を追って増大し、ついには本土決戦も近付いていた。

原子爆弾の投下、ポツダム宣言受諾による終戦は、その一年半前のことで、焼土と化した都市の復興こそ焦眉の急であった。農地改革、労働組合法公布、天皇の人間宣言につづき、その年に日本国憲法が施行されて、第一回の国会が開催された。

当時の地域一帯はどうだったか？　現・朝霞市、和光市には、軍服、軍靴などをつくる被服廠をはじめとして、火薬・砲弾を作る工場、貯蔵庫、また新座市には海軍の無線基地が置かれていた。また、終戦直前に、朝霞、和光市にかけての畑地に陸軍予科士官学校が移転してきた。現在の練馬区の光団地は、首都東京を防備するための飛行場で、戦闘機が砂埃を上げて飛び立っていた。このころ、戦後の復興は文化的な活動から、が合い言葉ともなって、新時代の地方文化の創出を目指し、新聞が発刊された。代表・岩下英隆、編集・神山博光、販売・吉田増次、広告・浪川七五郎の陣容だった。

しかし印刷する紙は極度に払底していた。もちろん自治体の「広報」などは皆無であり、ラジオはあってもまだテレビは無く、民間のメディアに目を向ける余裕も無かった。だがタイムス紙は毎週日曜日の発行となり、昭和三十四年八月には500号に達して週刊誌、NHKの放送でも取り上げられた。

地域紙の発行は執念とも言うべきものであった。社主となった岩下英隆の凄さは、報道に対して正義感に徹していたことであろう。地域の政治に対する歯に衣を着せぬ論説を展開した。当時は高価で入手が困難だったフィルムを使って多数の写真を掲載したことは、現代への遺産として他に替え得るものが無い。全く失われた県南地域のかつての有様は、タイムス紙のバックナンバーで蘇り、地域の歴史を紐解く重要な資料となっている(『市民プレス』43号参照)。

埼玉タイムス創設者岩下英隆

翌年の昭和二十四年、町議会が紛糾し、評決の結果、発足して間もない、町立志木高等学校が三月末をもって廃止され、その跡地に、志木中学校が移設される。

昭和二十九年(1954)四月、冠水橋の羽根倉橋が完成し、渡り初めが行われ、九月、志木小学校の鉄筋校舎が落成する。

昭和二十九年(1954)八月、**通称「防衛道路」(県道新座川越線)が完成した。**

「防衛」という道路の由来を問うと、海軍の無線通信所として開設された、「大和田通信所」になる(新座市、清瀬市に在って、戦後、米軍に接収され、現在は防衛庁が管理している)。その近傍に位置する大和田・国道交差点と、河越市小仙波の国道交点とを連結するため、志木市を経由する遠回りの路線が計画されたのである。

なお、接収された通信所は、真珠湾攻撃を開始する電信、「ニイタカヤマノボレ１２０８(ひとふたまるはち)」(新高山は、台湾に在って、当時は日本の最高峰)」が発信されたといわれ、戦時中は重要な役目をもっていた。

要請を受けた、志木町々長の井下田四郎は、新河岸川舟運の有力な「井下田廻送店」を継いだ方である。自らその跡地を使って、志木本通りから分岐する、大胆な実施計画を立てた。当時、通行人も疎らで、暗い山林が続いていた崖線の小道を切り開いて工事を進めた。

六・十一　志木町と宗岡村が合併して足立町となる

昭和二十四年に来日した米国のシャウプ使節団一行は、行財政を視察調査して、行政の能率を増進するため、町村合併の必要なことを強調した。

県下においても、町村合併への胎動は、志木町長井下田四郎、宗岡村長金子栄吉による合併協議へと展開され、両町村議会の議決を経て、昭和三十年三月、足立町が成立した。

昭和三十四年(1959)には、足立町に上水道が設けられ、同三十五年に、志木駅に南口が開設される。立教高等学校が池袋から新座町に移転したので、これに合わせたものである。

同三十七年、幸町に「小松フォークリフト」志木工場が、また翌年には「東洋キャリヤ工業」が創業した。同年、柏町に、当時は、柳瀬川の湿地帯だった地に、**日本レダリーが創業した・・・**

昭和二十八年、武田薬品工業とアメリカン・サイアナミド(ACC)との折半の出資によって設立された「日本レダリー株式会社」は、戦後始めての医薬品合弁会社だが、設立後十年の昭和三十八年(1963)、工場と本社機能の全てを、志木市柏町一丁目に移設した。地元では、「味場(あじば)」(柳瀬川が新河岸川に合流する辺りで、漁師が多く、「網師場(あじば)」に由来するという)と呼ばれた、柳瀬川の河川敷に沿った湿地帯なので、何度か氾濫に見舞われた。

日本レダリー社は、抗生物質として知られる「アクロマイシン」などを生産する医薬品メーカーとして、又、最新の研究施設を併設する有力な企業として活動していたが、平成六年(1994)、親の企業のACCがAHP(アメリカン・ホーム・プロダクツ／現・ワイス)に吸収合併されて新会社「日本ワイスレダリー」となった(参照：「本紙4号」)。

「水資源開発公団」が発足・・・

昭和三十八年、都内の水不足の悩みに対処するため、秋ヶ瀬取水堰の工事が始まる。公団の工事は翌年完成して、秋ヶ瀬河川敷の風景は一変した。すでに述べた通り、戦時中には飛行場となって、建造物らしきものは何も無い、広大な原野だったのである。

六・十二　伊豆殿堀が消失・・・

江戸時代から、志木のシンボルとなっていた用水は、予告も無く、昭和四十年、あっという間に取り片付けられた。護岸の大谷石、幾つもの石橋が消えて暗渠に代わる。この地、市場大通りで生まれ育った本紙編集人は、呆然とするばかりだった。通過車両が増加して、市場坂上付近の道路(県道)を拡張するためという。

市場通りの伊豆殿堀
撮影は新井康一氏

六・十三　校地変更によって、慶応義塾志木高校の新校舎が落成

昭和三十九年(1964)八月、建設省の告示によって、慶応志木高校の校地内を通過する都市計画路線(県道計画)が内示された。慶応義塾では、これに対応する検討を始め、その結果として、計画路線西側の校地約一万坪を売却(志木市開発公社に対して総額六億六千万円)、これを費用に充てる新学園建設第一期工事を決定。

新校舎を校地東側に建設するため、グランドを造成したのち、昭和四十二年(1967)四月、地鎮祭が行われ、本建築が開始された。翌四十三年三月、鉄筋コンクリート四階建ての新校舎群が完成して、四月には新校舎竣工披露が盛大に執行される。

六・十四　志木市の誕生

昭和四十五年十月、足立町は、埼玉県で28番目の市政を施行、名称は「志木市」となる。初代の市長に就いた小山正敏は、自治の向上、福祉の増進とともに、良き伝統を受け継ぎ、受け伝え、住み良い都市の建設を目指す。市庁舎の建設が始まり、昭和四十七年五月、落成した。

本町五町目は商業地に向って・・・

慶応志木高校の新校舎建設に伴って、かつての東邦産研由来の玄関付近を中核とする一帯は、大きく変貌する。志木駅に徒歩数分の立地をもつので、この地を取得した不動産企業は、新鮮で規模も大きなショッピングセンターの開発に取組む。

昭和四十九年(1974)十一月、「ダイエー志木店」がオープン。また、同月、その隣り、慶応の旧敷地を縦貫した都市街路沿いの縦長の敷地に、ホワイトを基調とした外観をもつ、十四階建て、三百三十八戸の分譲住宅「志木ファイブハイツ」(ファイブは、本町五丁目に由来)が完工した。志木開発を施主とし、施工主はフジタ工業株式会社(現・<株>フジタ)。

六・十五　志木ニュータウン

柳瀬川の右岸、志木市館の低地は、弥生時代から耕作されてきた水田だった。しかし、戦後次第に遊休農地となり、三十五万平米に及ぶ水田一帯の開発が計画された。昭和四十六年(1971)、鹿島建設が開発プロジェクトを結成、マンション建設に留まらず、エリア内の商店街、商業ビルの商業施設や、周

- 志木町と宗岡村が合併し足立町となる
- 昭和三十四年
足立町に上水道が設けられる
- 昭和三十五年
立教高校が池袋から新座町に移転、志木駅に南口が開設される
- 昭和三十七年
幸町に、小松フォークリフト志木工場が、また翌年、東洋キャリヤ工業が創業、柏町に日本レダリー(株)が創業
防衛道路が完成する
- 昭和三十九年
水資源開発公団の「秋が ヶ瀬取水堰」が完成。東京オリンピックが開催された
- 昭和四十年
市場の野火止用水が暗渠となって道路が拡幅される
- 昭和四十五年
志木駅が橋上駅舎に改築される。十月、市制が施行
- 昭和四十七年
志木市役所新庁舎が落成する
- 昭和四十八年
浦和・所沢バイパス、羽根倉橋架橋工事が完了する。JR武蔵野線が開通する
- 昭和四十九年
県立志木高校が開設される。志木駅東口にショッピングタウン(ダイエー)が完成
- 昭和五十年
本町二丁目で大火があり、42世帯、141人が罹災する
- 昭和五十三年
市民会館が開館する
- 昭和五十四年三月、ダイエーに隣地に、都市型複合施設、「志木ファイブ」がオープン。五月、市民救急病開設される。八月、志木ニュータウンへの入居が始まる
- 昭和五十五年
いろは水門が撤去される
- 昭和五十七年、志木ファイブの施設を取得した三井不動産は、リニューアルのち、受託運営により、同五十九年六月、76店舗、900台の駐車場の「らぽーと志木」がオープンした

辺道路の計画・建設などを含めた大型のもので、最新鋭の都市開発として、全国的にも話題となった。

地主に支払われた金額は巨額で、本紙編集人は、本町二丁目に在った農業協同組合から支払われた現金一抱えを持ち帰る人が、満面の笑みを浮かべていたことを思い出す。

昭和五十四年（1979）、南の森壱番街が完成して入居が開始され、同時に柳瀬川駅が完成した。翌年、南の森弐番街、志木市民体育館が完成、その翌年の昭和五十六年、東の森壱番街が完成、続いて五十八年～六十年、市立館保育園、鹿島ビルが、また、中央の森弐・参番街、東の森弐番街が完工した。昭和六十三年、中央の森壱番街、商業施設「ぺあも～る」が完成し、計画された施設の建設が完了した。主に商業の町として展開されきたオールドタウンに対比し、世帯数は約三千世帯にのぼる。昭和四十五年に施行された志木市政の中核となり、当時はまだ珍しかった二十階建のタワーマンション（通称・ガーデンタワー）が所在する中央の森壱番街では、不動産バブルのころ、一億円以上で取引される「億ション」の物件があった。

ニュータウンの世帯をターゲットとしたケーブルテレビの「志木ケーブルメディア」が、鹿島建設を中心とした出資で設立され、現在では、最大規模に展開された「JCom」に成長する。しかし、モダンで、魅力的だったニュータウンも、いま抱える問題は少なくない。建設から数十年が経過して、住人の高齢化のテーマは、テレビ「ガイアの夜明け」や、NHK「首都圏ネットワーク」でも取り上げられる。

六・十六　本町五丁目に戻って

旧校舎と敷地の一部を失った慶応志木高校は、新たな構想に基づいて、校舎を全面的に新築し、昭和五十三年（1978）十月、創立三十周年を迎え、詳細な記録として、記念誌が刊行された。

慶応志木高が移転した跡地には、すでに述べたように、「ダイエー」が開店し、「志木ファイブハイツ」が建設され、さらに同五十四年三月、商業施設の「志木ファイブ」がオープンした。同五十七年に三井不動産が施設を取得し、リニューアルされて、同五十九年（1984）六月、受託運営による、大規模商業施設、「らぽーと志木」がオープンした。

書店、楽器販売、家具店のほか、シネマコンプレックス、「志木らぽーとシネマ5」（五つのスクリーンで六百席余り）が東宝系列店によって運営され、隣接する「ダイエー志木店」と結ばれて、駅近の大型商業施設として、本町五丁目を繁栄へと導いた。

営団地下鉄が延伸されて・・・

昭和六十二年（1987）八月、東武東上線と旧営団地下鉄有楽町線（現・東京地下鉄有楽町線）の相互直通運転が開始される。

六・十七　平成の志木市は・・・

平成三年（1991）志木市市制二十周年を迎え、記念行事の一つとして、「ベートーヴェン第九交響曲」が演奏され、このとき参加した市民合唱団有志を母体として、同演奏会を指揮した三沢洋史を音楽監督・指揮者に迎え、男女百十名の合唱団を中核として、「**志木第九の会**」を結成した。毎年大曲に取組み、開催される定期演奏会は、市民には好評で、本年、盛会裡に第十九回を迎えた。

平成四年三月には、「**せせらぎの小径**」の一部が完成する。

平成九年三月、志木駅前東口市街地再開発が開始され（パンフレット「あすのまちづくりのために」）、平成十二年（2000）二月、竣工した。

一方、慶応志木高校の学生寮跡地が開発される・・・

駅前商業地区に近い「慶応志木高校」のキャンバスの一部、約一万数千平米（約四千坪）が大手不動産に売却された」という情報が、市民の耳に届いた

着工直前の事業区域（平成八年十二月撮影）

志木市と新座市との境界に在って、多くの懸案を抱えたまま、長期間に亘ってスタートできなかった駅前再開発が着工した。

北に延びる東上線の線路に沿って着手された、駅前開発の工事現場を望む

（慶応志木高校開設五十年記念誌より）

上の写真とは逆方向に、駅前開発の工事現場の方向から、「志木ファイブハイツ」を望む

と池田要の影絵が飾られた）をもつ広場から、中央通停車場線が拡幅された。さらにユリノキ通り交差点まで、電線の地下化によって、志木駅前のモダンな景観が、創出された（翌年、市街地再度開発事業誌、「小さくともキラリと光るまち」が発行される）。

平成十年（1998）、慶応志木高校は、開設五十周年を迎え、記念式典を挙行、記念誌、「志木高五十年」を刊行した。

一方、慶応志木高校の学生寮跡地が開発される・・・

駅前商業地区に近い「慶応志木高校」のキャンバスの一部、約一万数千平米（約四千坪）が大手不動産に売却された」という情報が、市民の耳に届いたのは、平成十四年、盛夏の頃だった。近隣で暮らす住民は、思案の末、「慶応高校の緑に想いを寄せる会」を設立して、署名を開始した。「開発業者と志木市当局に要請する」、とする八千名以上の署名簿を市長に提出した。住民を含む三者協議の場をつくられることを要請した。

昭和49年（1974）11月13日のオープンのチラシから

平成25年（2013）7月31日に閉店
店長の最後の挨拶
「ふじもと・わたる」氏のブログより転載　http://blog.goo.ne.jp/watarureport/e/0c2a8cb923065a94344a5253f93a8d09

翌年、自然環境の核となる斜面林を保護し、学生寮のシンボルだった大銀杏を、敷地の中央に移植すること、などを条件として合意に達し、大規模開発工事は開始された。

つづいて、同十五年四月には、志木小学校を含む、「**いろは遊学館**」が竣工した。

平成十五年七月、本町二丁目の「**朝日屋原薬局**」が有形文化財として国に登録される。一方、

同十七年（2005）、三月、本町五丁目、駅近の中核だった「**ららぽーと志木**」が閉館して解体される（市民プレス24号）。跡地には、三井不動産、東急不動産が協同で分譲マンション「パークホームズ志木ステーションファースト」を建設した。同二十年、十四階、百九十五戸が完工、志木市、新座市（東北二丁目）との境界に所在するが、志木市本町五丁目と表示されている。

同年、八月には、長沼明市長が財政非常事態宣言を発令したが、市当局の努力によって回復に向かい、同十九年八月、市長が財政非常事態の脱却を宣言する。

「**志木いろは市民大学**」（平成十六年に開校）によって、同二十年（2008）、「志木のまちボランティア案内人養成講座」が開講される。

応募した市民十数名は、神山健吉（志木市文化財保護審議会々長）の指導のもと、古文書の読み方を学び、ガイド実習を体験して、「修了生レポート」を作成した。

市民大学々長（西山賢一教授）の挨拶で始まった発表会では、学術論文の域に届くかと思われるアカデミックな内容のレポートを発表し、つづいて、この講座の趣旨に沿った活動が開始された。「志木のまち案内人の会」（会長：一ノ倉達也氏）が組織される。

平成二十年（2008）、六月、東京メトロ副都心線が開業。同時に、東武東上線と東京メトロ副都心線の相互直通運転が開始される。

同年十月、人口が七万人を突破。

同二十二年、柏町の「市民プール」の跡地に「埋蔵文化財保管センター」がオープン

同二十三年（2011）三月十一日、東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）で発生した津波が秋ヶ瀬取水堰に到達。

同二十五年（2013）七月、三十九年の歴史の幕を下ろして「**ダイエー志木店**」が閉店する。

「ダイエー」の跡地にはまもなく大型のマンション群が建設され志木市本町五丁目駅近は変わる。

そして、志木市全域の景観は激しく変化してゆく。

「市民フォーラム」の活動

「市民フォーラム」は、地域住民と行政に対して取材活動を行ない、報道によって市民の公共参加を推進します。また市民間のコミュニケーションの増進に努めます。

読者の「オピニオン」（意見・感想）をお寄せ下さい。

TEL　090（3048）5502

編集部原宛にどうぞ

本紙「市民プレス」は年四回（一、四、七、十月、各五日）発行。